
ジンジャークッキー

麻未夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジンジャークッキー

【Nコード】

N6784P

【作者名】

麻未夢

【あらすじ】

そのケーキ屋の『ジンジャーマンクッキー』をツリーに飾ると恋人が出来る、らしい。別に信じてるわけじゃないが、奇跡は家にも起こらない物だ。イブの日、俺はさっそく近所のスーパーに出かけた。そして……

その町の小さなケーキ屋が十年も前のクリスマス前に売り始めた『リボンを付けた女の子』を象ったジンジャーマンクッキーは、毎年売れ残ってはクリスマス当日に売れ残りのケーキとセットで安く売られるのが常だったという程に、人気の無かった商品だったのだが、ある奇跡的な出来事が町中に知れ渡った次の年からは、店頭に並べば即完売する程の大人気商品、とまでは行かないものの、クリスマスイブを前に何とか売り切れてはくれる人気商品になってしまった。

その、ある奇跡的な出来事が起こったのは、五年前の事である。その年のクリスマスを数日後に控えたある日、せめて形だけでも楽しいクリスマスを迎えようと考えたのは、彼女いない歴と年齢がぴったり同じの冴えない男の子。

そんな彼が楽しいクリスマスを迎える為の参考にと、雑誌で紹介されていた海外のクリスマスの過ごし方を紹介する記事を読んで、最も印象に残ったのが、子供達が母親手作りの『ジンジャーマンクッキー』をクリスマスツリーに飾る様子だ。

食べ物をつりに飾るという発想に驚いたのが一つ。そして、そのジンジャーマンの戯けた表情に、何故か心引かれる物があったのが決め手になった。

彼は早速ケーキ屋に向かい、一人で食べるのにちょうど良いサイズのクリスマスケーキの予約を入れるついでに、リボンを付けた女の子の形をしたジンジャーマンクッキーが数枚詰められた袋を一袋購入して、オモチャ屋で購入した小さなクリスマスツリーにそれを飾ったのである。

殺風景な一人暮らしの部屋の窓辺にツリーを飾ると、それだけで楽しいクリスマスを迎えられるような気分になったというのだから、彼は冴えないばかりか、とても単純な男の子であったようだ。

そんな彼が、クリスマスイブの日に、クリスマスケーキを受け取る為にケーキ屋に行く途中、その奇跡は起こった。

角を曲がればケーキ屋、という所で女の子とぶつかったのである。あまり運動神経の良くない彼にしては奇跡的な反射神経で、尻餅をつきそうだった女の子を何とか支えたは良いが、しかし彼女の持っていたケーキの箱は完全に潰れてしまっていた。

彼はそのケーキが自分の注文した物と同じ物らしいことに気づくと、女の子に少し待っていて欲しいと伝えて、急いでケーキ屋に向かった。そして、自分の予約したケーキを受け取り、その場所に戻った彼は、そのケーキを彼女に手渡した。

勿論、とんでもないと断る女の子。しかし、彼は強引にそれを渡すと、一目散に自宅に向かって走り出す。

慌てて追いかける女の子。まさか追いかけてくるとは思わず、とりあえず必死に逃げる男の子。

残念ながら、女の子の足は速かった。

すぐに男の子に追いつくと、女の子は「なら、せめて半分こにしましょう」と提案し、男の子は息を切らしながらも小さく頷く。

そうして、男の子の部屋でケーキを半分こにしての帰り際、女の子は男の子の部屋のツリーを観てこう言った。

「私、ジンジャークッキーをいっぱい作っただけです。明日持つてくるので、一緒に食べませんか？」

「—— っとな感じで、その後もクッキーのおかげで彼女いない歴に終止符を打った奴が続出して噂があったんで、買ってきた」

そう言って、無駄に可愛いリボンで飾った袋に入ったクッキーを俺に渡したのは、この部屋の同居人だ。

実家に帰っても両親や姉妹から邪魔にされるだけで、しかも彼女のいない同士ということで、今年は部屋で男二人の虚しいクリスマス

スを過ごそうって予定を立てたのも、この同居人だったのだが、今日になって裏切ってくれたのもまた、この同居人だ。

なんでも、地元で付き合っていた元カノと偶然再会し、また付き合う事になったらいい。

そして、クリスマスイブを明日に控えたこの日、お詫びを兼ねた早めのクリスマスプレゼントとして小さなクリスマスツリーとクッキーを俺にくれた同居人に対し、俺は勿論お礼ではなくて大きな溜息を返してやった。

「まあ、そうブルーになるなって。もしかしたら、噂通りに明日出会いがあって、来年のクリスマスイブは楽しく過ごせるかもしれないだろ」

この時期の彼女持ちの浮かれようは、正に異常だ。

当然、この同居人も例外ではなく、自らツリーを箱から取り出して窓辺に置くと、「ジングルベル、ジングルベル」なんて歌いながら、クッキーをそのツリーに飾っている。

「よし、完成。んじゃ、俺帰るわ。じゃあな」

実家に帰っても邪険にされるだけなのに、彼女の為ならそんな実家に喜んで帰る同居人は、年内には帰ってこないだろう事は間違いない。

結果、俺は寂しいクリスマスどころか、年末年始を一人寂しく過ごす羽目になってしまった。

他の友達も大概は彼女持ちで、それでなくてもとくに予定を埋めている奴らばかりで、俺の割り込む余地はない。

今から一人で旅行に行くにも宿の予約なんて取れそうもないとくれば、もう諦めて寝正月ならぬ寝クリスマスに寝大晦日を決め込むだけだ。

なんて考えつつも、イブ当日になれば、せめて気持ちだけでもクリスマス気分になろうと、チキンなんて買いに出かけてしまうんだから、俺も相当イベントに弱い人間だよな。

ま、正直な所を言えば、同居人に聞いた話のせいってのもある。

だって、家で寝ていても奇跡なんて起こりようもないだろ。

だが結局は、近所のスーパーまでの道のりも、そしてチキンを買って家路を辿る帰り道も、俺に出会いという名の奇跡は起こらないまま、俺はアパートの前。

小さく息を吐き、「別に信じてたわけじゃないけどさ」なんて、誰に向かったの言い訳なんだか解らない言葉を声に出して呟いた俺の耳に、か細い、今にも消えそうな小さな鳴き声が飛び込んできた。キョロキョロと周りを見回して、そして見つけたのが自転車置き場の隅にいる小さな子猫。

ミヤア、ミヤア、とどこか必死に訴えてくるその声は、猫語を解さない俺にだって、腹を空かせて鳴いてるんだろって事は簡単に予想がついた。

そんな俺の手にはチキンがあつて、同居人は不在だ。

—— ああ、これがジンジャークッキーのもたらした出会いか。

なんて考えた訳じゃないが、年明けに意気揚々と帰ってくる同居人への当てつけになりそうだと考えた俺は、クリスマスと年末年始を共に過ごす相棒を片手で抱き上げた。

その時だ。

「ミイちゃん、どこ？ ミイちゃんっ」

誰かを探す女の子の声。ミイちゃんって名前から察するに、猫だろっな。

そんな俺の手には、腹を空かせている人懐っこい子猫。

俺は声のする方に歩いていき、車の下や植木の影を必死に探す女の子に声を掛けた。

今日は、クリスマスイブ。

—— この日、この町のジンジャークッキー伝説に、また新たなページが加わった。

そんなナレーションめいた言葉を胸の内で呟いた俺は、顔を上げた涙目の女の子に、片手に抱えた子猫を差し出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6784p/>

ジンジャークッキー

2010年12月23日23時10分発行